1ère
Gymnopedie

『ミロ？　どうしたの？　みんなのところへ行かないの？』
『だってかあさん、この木、まっしろな花がさいてるよ』
『そうね・・・ほかのお友達にも教えてあげたら？』
『知るもんか！　あいつら、かあさんのことばかにしたんだ！』
『・・・何て・・・？』
『うらぎりものだって。うらぎりものの娘だって！』

「君・・・どうして泣いているの？」
「だって・・・かあさんがここでまっててって言ったんだ！　まっしろな花がきれいだから・・・とうさんも、いっしょにここでお昼を食べようって・・・！」
「それじゃお家へ帰ろう。きっと君を待っているんだよ」
「いやだ、かえらない！あんな家・・・かえらないよ！」

『まっててね、ミロ。すぐに帰って来るから。』
『お前は何も恥じなくていいんだよ、ミロ。僕もイルマもちっとも気にしていないんだから。・・さあ涙を拭いて。針槐の木の下で、一緒にお昼を食べよう。きっと元気が出るから・・・・』

「ミロ、家においてあげるけど、お前も出来ることは自分でやるのよ？　家はただでさえ忙しいんだから」
「本当に、最後まで厄介なことばかり巻き起こしてくれて・・・・勘当同然であの女と結婚したくせに、子供一人育て切らないうちに二人して死ぬなんてねえ」
「案外心中だったんじゃない？　事故に見せかけて。よくある話よ」

『待っててね・・・ミロ。すぐに帰って来るから・・・・・・』

ミロはゆっくりと目を開けた。遠く天空に、青々と茂った針槐の葉が揺れている。葡萄の房のような花の蕾は、今にもはちきれんばかりにふくらんで白い花びらを覗かせていた。

――また、針槐の季節がやって来る。――――

木漏れ日をまともに瞳に受けて、少し目を細める。遠い日に、太陽が西の空にすっかり沈んでしまうまで両親を待ち続けたことを思い出し、彼は苦笑した。針槐の下の約束。果たせる筈などなかったのだ。その時、彼らの魂は既にこの世界になかったのだから。

――もう・・・十年経つんだな・・・・――――

今は、彼らが約束を違えたことを恨む気持ちはない。だが、この身体に流れる両親の血は、いくつになっても煩わしい。たとえ彼らから受け継いだユダヤの血を恥じる気持ちはなくてもだ。

仰向けに寝転んだ青草の香りが、ふわりと髪を揺らす風に乗って鼻を擽る。やがて、辺り一帯は甘い花の香りで一杯になるだろう。

「さてと。もう戻らないと、またげんこつ食らうな」

ミロは弾みをつけて跳ね起きると、ブックバンドで束ねたノートを肩に担いで走り出した。

「ミロ！　今日は早く帰って来いと言っただろう！」

案の定、家に帰るなり養父のルキノの怒鳴り声が飛んできた。

「先生に呼ばれたんだよ！　しょうがないだろ！」

「先生に呼ばれた？　何やらかしたんだ、お前」

「それは・・・・・」

ミロは口籠った。あまり養父を喜ばせる話ではない。特に、彼の息子であるクーリオには面白くない話だろう。
「・・・仕事を手伝ってくれって。今俺席が一番前だから、捕まり易いんだよ」
「どうだかな。またその辺りをふらついていたんじゃないのか？」
「・・・どのみち仕事が終わるまで食卓に着く気はないよ。それでいいだろ？」
「当然だ」
ミロは諦めて倉庫へ網を取りに入った。今日は仕掛け網を作ることになっていたのだ。
「手を抜くなよ。網が破れてきれいに魚を逃がしちまうぞ」
「わかってるよ」
積み上げると山のようになる網を眺め、深い溜め息をつく。
　ミロが見たところ、ルキノは不公平な男ではなかった。両親を亡くしたミロを渋々引き取ってからと言うもの、確かに普通の子供達より働かせはした。だがそれは彼の息子であるクーリオも同じであり、子どもだろうが何だろうが家計の一端を担うのはこの家の掟だったのだ。
　だが。こと学問の話になると、養父母の視線は急に厳しくなる。
『流石に学者の血を引くだけはあるな。またトップを取ってきたのか？　ミロ』
『クーリオにも教えてやってちょうだいな。折角同じ家にいるんだから・・・』
　それが、誉め言葉の皮を被った羨望であることは、ミロにも十分解る。彼らは、ミロとクーリオが逆だったなら、と願ってやまないのだ。
「安心しなよ・・・。俺は高等学校にも大学にも行く気はないから。中等部を出たら、さっさと働きに出るさ」
ルキノがいなくなったのを確かめて、ミロは一人ごちた。そうだ。育ててやった恩を忘れたと後ろ指差されるくらいなら、働いて、借りを返して、こんな家とはおさらばしてやる。
　畜生、と呟いて、ミロは網の束を取り上げた。

「スイスのギムナジウムでは、駄目ですか？」
カミュはまっすぐに瞳を上げて父を見た。
「何を言う。パリのソルボンヌ大学に行くなら、今からフランスのリセに入るのが一番だ。今から準備すれば、お前の頭なら簡単に大学入学資格を取れる」
「御父さん。私は・・・・」
カミュは口籠った。打ち明けた後の父の顔が目に見えるようだ。
「・・・理学をやりたいんです。神学ではなく」
「・・・何だと？」
ジョルジュ・フロベールは度のきつい眼鏡をずり上げて、カミュを睨んだ。自分が生涯をかけて研究してきた神学の道を、息子は継がないとでも言うのか。
「馬鹿を言うな。小さいころからお前は言っていたではないか。大人になったら、私のような立派な神学者になると」
「・・・私は何も知らなかったのです。そのほかの学問があることなど。物心ついた時から、神学者しか私の周りにはいなかったので・・・・」
「それで十分だ。他の学問など、神学に比べれば無に等しい」
カミュは溜め息をついた。そうまで自分の学問に命を捧げる父をある面では素晴らしいと思うが、時代錯誤的なその考えには、どうしてもついてゆけない。
ひとまず引こう、と彼は思った。この上生物工学を目指しているなどと口にしたら、どんな逆鱗に触れるか解ったものではない。
「・・・また来ます」
溜め息混じりの一言を残して、カミュは父の書斎を後にした。

「ミロ、お前また先生に呼ばれたんだってな」
四限目の体育の後、ミロはクーリオに呼び止められた。昼前の体育館。他に、人影は見当たらなかった。
「ああ。そうだよ」

「コレットだけじゃない。校長室に呼ばれることも多いそうじゃないか。その金髪が気に入られたのか？」
「・・・下簾な勘繰りはよせ。この時期にはよくある話だろう。・・・俺にも関係ないことさ」
興味のかけらもない声で、ミロが返す。クーリオは濃い茶色の眉をひそめた。
「お前、進学する気なのか？　裏切りはよせよな。親父はすっかり働いてもらうつもりでいるぜ？」
「裏切る？　俺がいつ家の手伝いするって言った？」
ミロの語調が変わる。流石にむっと来て、ミロはクーリオを睨みつけた。働いて借りを返すとは言ったが、家を手伝う気などさらさらないのだ。
「勝手に思い込んで、その通りにならなかったからって他人のせいにするなよ。裏切り者よわばりする前に、もう一度自分を振り返ってみたらどうだ？」
「何だと！」
「ふん、裏切り者を裏切り物よわばりしてどこが悪い」
突如、体育館の入口の方から別の声が聞こえた。ピサロ。人一倍大きな体と力で、クラスの大半を牛耳るグループのリーダー。彼は決して自分に媚びようとしないミロが気に食わないのだ。
「この間、ジョルダーノの仕事の邪魔をしたそうだな。部外者は黙認しろと言った筈だぜ？」
「私刑をか？　別に正義の味方を気取る気はないが、虫の息になって血吐いてる奴を放っとけるかよ」
ゆうに頭一つ分は大きいピサロを斜めに見上げて、ミロは平然と吐き捨てる。やって来たのはピサロを入れて五人。どうやら嵌められたようだった。クーリオは、ミロを他の生徒から引き離すための囮だったのだ。
「ふん・・・随分でかい口を叩くじゃないか。相変わらずだな、ミロ。だが、そんな口をきいてられるのも今のうちだ。ジョルダーノ、この間の恨み晴らしに行くぜ！」
少年たちがミロを取り囲む。ミロは小さく舌打ちして床を蹴った。いい加減聞き飽きた決まり文句だが、応戦しない訳にはいくまい。相手は五人。動きを読まれたら終わりだ。
「どけよ！」
ミロのバネをきかせた蹴りが少年の脇腹に決まる。だが、同時に横合いから飛んできたピサロの拳が、ミロの頬をしたた

かに殴りつけた。
「この野郎！」
すかさず、お返しの一発を繰り出す。
クーリオは、見入られたようにミロが追い詰められてゆく様を見つめていた。少しずつ狭くなる包囲網の中で、黄金の髪が激しい動きに合わせて舞う。青玉色の瞳はますます鋭い輝きを増し、上気した白い頬を汗の滴が流れ伝っていく。
あいつを、目茶苦茶にしてやりたい。あの黄金の髪が泥に塗れる様を、この目で見てみたい。ふとそう考えて、クーリオは愕然とした。
――俺は今何を・・・！――――
大嫌いなミロを、屈服させてやりたいと思ったのだ。誰よりも優秀で、ピサロでさえ落とすことの出来ないミロを、力ずくでねじ伏せて自分のものにしたいと。
――・・・嘘だ・・・あいつを欲しがるなんて・・・！――
ピサロの腕が、ミロの襟元を掴む。残虐な笑みが、ピサロの歪んだ唇に浮かぶ。大きく反動をつけて壁に叩き付けられた瞬間に、ミロは非常ベルのカバーを叩き割った。もとより最後まで勝負をつける気はない。今まで交戦していたのは、少年達の注意をベルから逸らすためだったのだ。
けたたましいベルの音が、学校中に響き渡る。
「・・・畜生！」
ぎりぎりと歯を鳴らして、ピサロはミロを突き飛ばした。仲間に、引き上げの合図を出す。もはや、一刻の猶予もない。私刑は、自宅謹慎の重罰なのだ。
ミロは一人残ったクーリオを見た。その顔は青ざめて、小刻みに震えていた。
「・・・逃げないのか」
冷ややかなミロの言葉が、クーリオの胸に突き刺さる。
「・・・くっ！」
クーリオは、くるりと踵を返して駆け出した。自分でも、何故ミロの言葉に屈して逃げ出したのか解らなかった。冷や汗が玉のように吹き出す。
学校の端まで逃げ続けて、非常ベルの音が全く聞こえなくなった時、クーリオはやっと大きく息を吐いた。反抗的な青い瞳が脳裏に浮かぶ。
「そんな筈は・・・ない！」
唇を噛み締めて、クーリオは絞り出すように呟いた。

「ミロ、この間の話は考えてきてもらえただろうね？」
　ミロの担任、コレットは、数枚の書類を広げながら言った。このアスコーナの町のある南スイスにはいわゆる進学校がなかった為、先日彼はミロにベルンにある私立校に進学するよう勧めたのだ。
「君なら学費免除が狙える。うまくして好成績を取れば、給費寄宿生にだってなれるんだ。そうすればご両親に迷惑をかけなくても学校に行けるのだし・・・・」
コレットは、ミロを見込んでいる。腕白なのはほかの子供と一緒だが、彼が授業時間に見せるひらめきの鋭さは、他に類を見ない。このまま埋もれさせてしまうには惜しい存在だった。
「何よりもミロ、君は勉強が嫌いじゃないだろう？」
「でも先生、俺がいなくなったら働き手が一人減るんです」
ミロはわざと興味なさそうに答えた。
「家は忙しいし・・・育ててもらった恩もありますから」
「しかし・・・君は十分今までも働いていたじゃないか。家の手伝いの他に、休みにはアルバイトにも出ていたし・・・ほんの数年、勉強の為に家を離れても――――」
「裏切り者の息子がですか？」
「ミロ・・・！」
コレットは驚いたようにミロを見た。
「君がそんなことを言ってどうする・・・卑屈になってしまったら道は開けないよ。君は何も悪くない。亡くなったご両親だって、今の君の言葉を聞いたらきっと悲しむだろう」
「卑屈になっている訳じゃない。みんなの言うことだって正しいんだ。俺だって、みんなが危ない目に遭ってる時に一人だけ助けて貰える奴がいたら、そいつを恨みたくもなるよ、先生」
　いつのころからか、ミロは自分に背負わされた業にひどく敏感になっていた。三十年前、ナチスが猛勢を奮っていた頃に、一人の有名なユダヤ人精神分析学者がウィーンを離れた。

最後の最後まで粘り続けた挙げ句の、亡命だった。アメリカの大統領、デンマーク王妃、イタリアの総統・・・それら様々な実力者の力を得て、巨額の亡命税を払っても、自分の兄弟すら救い出すことはかなわなかったと言う。

今、何も知らぬ人ならば、そのことを責める者はいまい。だが、その時にその場に居合わせた人々はどうか。日に日に肉親や思い人が殺されていく中で、彼らだけが外国の手によって救われ、安全な地へと去っていくのだ。

行き場を失ったナチスへの呪いの言葉は、そのまま彼らの上へと降り注いだ。ミロは、そんな学者を父に持つ母親と、ウィーンで九死に一生を得た若い学者の間に生まれたのだった。

『あの女と結婚するのか　裏切り者の娘と！』

『お前も裏切り者だ・・・！　ユダヤの誇りを忘れた売奴め！』

ただのユダヤ人ならまだいい。ミロは外から見れば『ユダヤ』であり、同じ同胞の目には『裏切り者』なのだ。

「解ってるよ。自分で切り開くしかないんだ。さっさと自立して、誰にも迷惑かけずに生きられるようになるしか・・・・」

「ミロ・・・・・・」

コレットは痛ましげな瞳でミロを見た。この十五にも満たぬ少年が時々ひどく大人びて見えるのは、優秀な両親を持ちながら幸運に恵まれなかった不幸故に違いない。

「・・・一応、書類を預けておくよ。気が変わったら、必要事項を記入して僕の所へ持って来なさい。今は辛く感じるかも知れないが・・・もっと年を取ったら、きっと君は後悔するだろう。矢張り学べる時に学んでおくべきだったとね。君が勉強が嫌いなら無理にとはいわないが、君は科学が好きなんだろう・・・？　僕は正直言って君に期待している。いつか、世界に名を轟かせる日も来るんじゃないかと思っているんだ」

「はい・・・」

ミロは首を垂れた。胸の芯を、小さな痛みが走った。

平日の公園は、人の姿もなくがらんとしていた。学校ではまだ授業をしている。ミロは、身体の調子が悪いといって早退してきたのだった。コレットはミロの仮病を見抜いていたようだったが、何も言わなかった。
「そんなに、気を遣うことないのに。」
俺は慣れてるんだから。ささやかな罪悪感を、小さな呟きでごまかす。コレットは、この町では数少ないミロの理解者であり、擁護者でもあった。子供同士の言い争いや陰口などでへこむようなミロではなかったが、大人達の悪意に立ち向かうだけの力はまだなかったからだ。
我知らず、ミロは針槐の並木道までやって来ていた。
「とうとう咲いたな・・・・」
空を埋めつくす程の、白い花。藤に似た房状の花が、一杯に張り巡らされた枝から下がっている。噎せ返る程の甘い薫りが、遠い地上にいるミロの所まで下りてきて服といわず髪といわず染み込んでいった。
「・・・もう、待ってなんかやらないよ?父さん、母さん」
少し笑みを含んだ声が唇から漏れる。
「あんたたちの償いをしてやるよ。間違ったことをしたとは思わないけど・・・俺をおいて死んだのはやっぱり間違いだったね。」
自殺だったかも知れない、とミロは随分大きくなってから聞いた。当時、ミロの父ニコラはある研究に携わっており、そのことでひどく悩み抜いていたと言うのだ。その話を耳にしてからというもの、ミロの中で何かが確実に変貌を遂げた。以前のように、回りの人々とかたっぱしから衝突することがなくなった。両親が誹謗されるのを聞いても、ただ冷めた目で見つめるだけだった。――そして、ヴァイオリンを弾くのをやめた。
「見てなよ。俺は――学者にはならない」
黄金の髪をすり抜ける風に、手にした書類が舞い上げられていく。
ミロは瞳を閉じた。白い花の中に溶け込んでいく、白い紙切れ。閉じた瞼に、かつて父が弾くヴァイオリンを聴いていた自分が写った。風が吹くと楽譜が舞い散って、ミロはそれを追いかけてどこまでも走っていったのだ。母親と共に。
「――すみません」
ふいに、澄んだ穏やかな声がミロの空想を遮った。

「これ・・・あなたのでしょう？」
ミロはびっくりして目を開けた。白い花の中に人影が立っている。そして、今度はその声の主に釘付けになった。
――妖・・精・・・・・？――――
実際にこの目で見なければ、信じられなかっただろう。まるで枢機卿が身に着けるような見事な緋色の髪が、風に吹かれて靡いていたのだ。
――何だ・・・・？――――
その髪よりも更に深い紅の瞳が、不思議そうにミロを見つめた。
「違うんですか？　すみません・・・でも、他に人影が見当たらなかったので・・・・」
すんなりとした右手に、数枚の書類が握られている。間違いなく、ミロが飛ばした願書の束だ。
「いや・・・俺のだけど・・・・・」
ミロはやっとのことでそれだけ答えた。ちゃんと喋るし、足もあるし、こいつはきっと人間だ。
「――ああ、この髪と目の色に驚いているんですね？　安心して下さい。突然変異で・・・・悪魔じゃありませんから」
――・・・悪魔――――
その言葉に、ミロははっと我に返った。自分が彼をどんな目で見つめていたかに気付いたのだ。
「ご・・ごめん！　・・・何だか夢見てるみたいで・・・・・」
「気にしないで下さい。驚いて当然ですから」
赤い切れ長の瞳が、少し寂しげに俯く。ミロは下を向いて唇を咬んだ。言葉と表情とが、自分に重なった。
――馬鹿か！　俺は・・・・――――
まさか自分がされたのと同じ仕打ちを、他人に加えることになるとは。
「ではあなたのものなんですね？　間に合ってよかった」
赤い髪の少年は、今あったことなど忘れたように笑った。
「そうなんだけど・・・・ごめん。それ、捨てたんだ」
「捨てた・・・？　どうして？　これは特別推薦状でしょう？
本当に一部の生徒にしか与えられない――――」
「うん・・・俺、進学する気ないから。」
なるべく淡々とミロは答えた。端からそう見えたかどうかは解らないが。
「何故・・・？　勉強、好きなんでしょう？」

少年が、不思議そうに首を傾げる。
「え・・・？」
「それ・・・ニュートンのプリンキピア。私の知人も読んでいます。大人向けだから難しいけど、物理学が好きなら面白いって」
ミロは慌てて手元を見た。確かに、やっと貯めた小遣いで買った本が、教科書と一緒にブックバンドの間に挟まっていた。
「うん・・・でも、俺、中等部出たら働くって決めたんだ」
「働く？」
少年が目を丸くする。
「そうだよ。自分で働いて、お金を貯めて、誰の世話にもならないで生きていくんだ。これから一生・・・・やっと、働ける年になった」
ミロは真っ直に瞳を上げて言った。そうだ。その自由に比べたら、少し位学問を続けられることが何だと言うのだろう。
だがミロは気付いていなかった。そうまでして否定しなければならない程、自分が物理学に惹かれていることに。
「君は学校に行くんだね？　何かやりたいことがあるの？」
さっきの無礼の詫びも兼ねて、ミロは気さくに尋ねた。この夢のような少年に、好意と興味を覚えたのだ。
「それが・・・・・・」
少年が困ったように俯く。
「・・・本当は、私にだってやりたいことがある。でも、それに気付くのが遅かったんです。多分、これからも今までと同じように生きていくんでしょう」
「待てよ、それじゃ気が早いよ。もう遅いだなんて・・・・たとえ六十才になったって、そんなことはないよ。もし本当に間に合わなくったって・・・・・・」
そこまで一気に言って、ミロは頭をかいた。少しカッコつけ過ぎだけど、まあいいか。
「周りに流されてしまうよりは、戦い続ける方がいい。少なくとも自分だけは、自分の味方になってやれる」
深い地中海の青を思わせる瞳が、じっと赤い瞳を見つめる。
少年は戸惑った。こんなに素直に自分を見つめる瞳に、彼は出会ったことがなかったのだ。そのサファイア・ブルーが宿していたのは、好奇心でも羨望でもなく――もっと自分に近い者、仲間への心づかいだった。
彼は悟った。この黄金の髪をした太陽神のような少年が、

決してその姿に見合う運命を享受してきた訳ではないことを。
「すみません・・・・甘えた人間だと思ったでしょうね」
「そんな・・・謝ることないよ。俺は確かにきかん気だし・・・そうやって努力しても、実らないこともあるんだし。偉そうなこと言っても、結局あぶれ者だから自己満足に浸ってるだけなのかも」
沈んだ口調に慌てて弁解して、ミロは苦笑した。よけいな事を言った、と思う。この育ちの良さそうな少年は、きっと皆から愛されているのだろう。そんなにふうにしてまで我を張って自分を守る必要などないのだ。
少年はミロの心を察したようだった。そして、遠い憧れを望むような眼差しで、ミロを見つめた。
「どうして？　あなたに惹かれる人も居るでしょう。歯を食い縛って頑張っているから、あなたの気付かないところであなたの味方になろうとしている人もいる筈だ。」
「俺に・・・？　いないよ」
「そう？」
少年はにっこりと笑った。それは、ミロが久々に見る暖かな『人間』の微笑みだった。
「父がよく言うんです。人は自分の罪に鈍感だけれど、時折自分だけに与えられた宝物にも気付かないって。そして一生その事に気付かないまま宝物を潰し、使命を果たさずに命を終えてしまう・・・それも長い目で見れば『罪』なのだと。私はそこまで厳しい考えの持ち主ではないけれど、矢張りその『宝物』に気付けないで終わる一生は悲しいと思う」
「自分だけに与えられた、宝物・・・？」
「そう。あなた程前向きな人なら、すぐに見つけられるでしょう。今出会ったばかりの私の目にさえこんなにも明らかなのだから。」
風が、白い花びらを一斉に舞い上げた。その花びらの混じった風が透き通るように白い頬を撫で、肩を少し過ぎたぐらいの細い紅の髪を梳き上げていく。白と紅が乱舞する、本当に夢のような情景。だがそれよりも深くミロの胸に刻み込まれたのは、まっすぐに心の奥まで入り込んで来るその微笑みだった。
「ふうん・・・そんな考え方もあるんだな・・・」
「あなたのことは何も知らないけれど・・・・あなたが一刻

も早く立派に自立出来るように願っています。あなたの望みがかなうように。私も・・・・諦めないで頑張ってみる勇気が湧いてきました。有り難う。」
「うん・・・こちらこそ。わざわざ拾い集めてくれて・・・」
「そろそろ・・・戻ります。父と待ち合わせているので。よろしかったら、名前を聞かせて頂けませんか？」
　ミロはちょっと考えて、ミロ・サヴォナローラと名乗った。それは、かつてミロが名乗っていた名前だった。
「君は？」
右手を差し出して、ミロが尋ねる。
「カミュ・フロベール。今はジュネーヴにいるんです」
それが、赤い髪の少年の答だった。

「校長から言い渡されてね」
　コレットは、いかにも困ったと言うように腕を組んだ。
「うちの学校の名誉の為にも、誰か一人を私立受験に出してほしいと言うんだ。ぎりぎりまで検討してみたが、生憎今年は君以外に試験に通りそうな子がいない。別に入学しなくても構わないから、試験だけでも受けてきてくれないか？　ミロ」
「でも・・・・・・」
「受験費や交通・滞在費は学校から出る。ご両親には僕から話をしよう」
ミロは押し黙った。クーリオがどんな顔をするか、目に浮かぶようだ。
「・・・君の決意は解っているよ。だから頼んでいる。君なら周りに流されずに、自分の道を選べると思うからなんだ。あの学校は・・・アルテンベルク高等学院は、生半可な気持ちでついていける学校じゃない。受かったからといって安易に入学を決めるような子には受けさせたくないんだ。解るね？」
「それは解ります。でも初めから行く気のない人間が受けるのはまずいでしょう」
コレットは腕を組み直して大きく溜め息をついた。解っては

いたが、どうもミロは思いこんだら命がけ、と言った所が抜けない。
　だがコレットは、そんなミロの頑なな態度の背後に潜むものを見抜いていた。そうして思い込まなければ、ミロは学問への興味を断ち切れないのだ。
「確かに良くない。だが今回は仕方がない」
だから彼は、その一言でミロの退路を塞いだ。嘘は百も承知。アルテンベルクの空気に触れて、それでも働きたいと思ったなら、その時こそ働きに出れば良いのだ。
「そうですか・・・・・」
沈んだ声が部屋に広がる。ミロは黄金の髪をかき上げて俯いた。校長推薦とあっては、どう足掻いても逃れられそうになかった。
「・・・解りました。受けるだけなら・・・・」
顔を上げて、ゆっくりと頷く。
「そうしてくれるか？　有難い。それじゃこの間渡した願書を出してくれ。今ここで記入して、今日のうちに郵送してしまうから」
　鞄の中身を探るミロの手が、徐に数枚の書類を探り当てる。どうやらうまくいったらしい。コレットは、内心の喜びを押し隠して、ほっとしたように笑った。

「聞いたか？　ミロの話」
　放課後の体育倉庫前。ピサロとその仲間たちが、たむろしながら悪態をついていた。
「ベルンのアルテンベルクに、校長推薦だってよ。あいつ、このままずらかる気だぜ？」
「ここを出る前に一度痛い目に遭わせてやらなきゃ、気が済まねえよな」
ジョルダーノが吐き捨てる。クーリオは、ただ黙り込んだまま眉を顰めて彼らの言葉を聞いていた。あの一件以来、彼はますますミロが嫌いになった。いや、本当のところは無意識のうちにそう思いこもうとしているのかも知れない。屈服さ

せてやりたいのは、自分より優れていて憎たらしいからだと。
「おい、クーリオ、あいつ本当にベルンに行く気なのか？」
ふと、隣にいたアルドがクーリオをつついた。
「え・・・？」
「ミロは就職組だって専らの噂だったじゃないか」
「・・・ああ、その話」
面白くなさそうな顔をしたまま、クーリオが答える。
「俺もそう聞いていたよ。俺だけじゃない。親父もさ。あいつ、親父の前では進学はしないなんて大見得切ってたんだぜ？家は人手が足りないから、親父だってそのつもりでいるのにさ」
「何だ？　あいつ育ててもらった恩人に嘘ついてるのか？」
呆れたような声が返って来る。クーリオは大きく頷いた。本当は、彼はミロに進学する気がないことを知っていた。早く一人前になって、誰にも迷惑をかけずに生きる。そう常々言っていたのを聞いていたからだ。だがどう頑張っても州立高校止まりの自分の目の前でアルテンベルクを受けに行くミロが、クーリオには許せなかった。クーリオもそれほど頭の悪い方ではない。ミロがいなければ、それなりの評価を受けていた筈なのだ。
「そういう奴さ。外面はいいが、腹の中では何を考えているやら」
「流石、親の子だな。自分の身だけが可愛いわけだ」
「やっぱり、けじめは付けてやらなきゃいけないよなあ」
ふと、声のトーンが変わった。ピサロの声。彼はたった今、今までの鬱憤を全て晴らす方法を思い付いたのだ。
「なあ、ちょっとちょっかいだして、試験を受けられないようにしてやろうぜ？」
「どうするんだよ？　あいつは捕まらないぜ？」
「俺に考えがあるんだよ。おい、クーリオ、お前も手伝うよな？」
唇をゆがめて、クーリオを見上げる。この計画は、クーリオなくしては成功しない。
「お前が手伝ってくれれば、万事ことはうまく運ぶんだよ。なあ、いいだろ？」
「・・・ああ。勿論だ」
クーリオはその笑いに引きずられるようにして頷いていた。ピサロが何を考えているかまでは、頭が回らなかった。これ

でいいんだ。俺はあいつが嫌いなんだから。
「よし、じゃあ決まりだ。このことは仲間内の秘密だぜ？まあ、楽しみに待ってな」
全員が大きく頷く。ピサロは仲間を見渡して、満足げに頷いた。

夏がやって来た。山合いの町は、一年で一番美しく生命に溢れた季節を迎える。だがこの時期に卒業試験を迎える子供達には、あまり夏は有難くない季節だった。スイスでは一部の学校を除いて入学試験というものは行われず、代わりに卒業試験が課されるのだ。
ミロはいつものように公園にやって来ると、抱え込んだ参考書のページを繰った。卒業試験は終わったが、ミロにはまだアルテンベルクの試験がある。入学する気はないとは言え、受けるからにはいい加減な点数は取りたくなかった。
だが。
「ちぇっ・・・・俺も未練がましいな」
色とりどりのラインが入った参考書を眺めながら、呟く。
日に日に、学問に惹かれていく自分が分かるのだ。今までは家の仕事が忙しくて、じっくり本を開く時間もなかった。だが今こうしてそのゆとりを与えられると、もっと先へ、先へと進みたくなる。疲れたらリルケやヘッセなどの詩集を読み耽り、アスコーナの芸術家達が奏でる楽の音に耳を傾け――そんな生活が、ミロの心を強く惹き付けてやまないのだ。
ふと、ここで出会った少年のことを思い出した。働きに出ると言ったら目を丸くして自分を見つめていた、見事な赤毛の少年。
「カミュ・・・どうしてるかな・・・・」
呟きが、我知らず口元を零れ落ちる。満開の花の中の、ほんのひとときの幻想。三か月たった今も、まるで写真を眺めるように思い出せた。あの一瞬だけは。
「望みがかなうように――か・・・・」
ミロは仰向いて瞳を閉じた。白い花、風に煽られて舞う赤い髪、温かな微笑みを浮かべていた形の良い唇、切れ長の涼し

げな瞳。この瞳に焼きついて離れない、宝石のような情景。
もしも両親が健在だったなら、あるいは彼と共に学びの席に着くことが出来たのだろうか？
鳥がかん高い泣き声を上げて、頭上を飛び去っていく。ミロははっとして目を開き、きりっと唇を咬んだ。
――俺は今何を・・・？――――
彼はやっと気付いたのだ。あり得ない仮定に慰めを見出す程に、自分が学問に焦がれていることに。
――カミュ・・・・――――
胸が苦しくなる。ミロにとって、かの赤毛の少年は解放の象徴だった。図らずも満開の針槐の下で出会った少年は、何の曇りもない瞳でミロを見つめたのだ。かつてミロの両親であった人々と同じように、何一つミロのことを知らぬが故に。
「・・・だから嫌だって言ったんだ・・・こんな試験！」
つと、目頭が熱くなる。ミロは軟弱な自分の意外な一面に腹を立てて、畜生、と思いきり叫んだ。

「条件は三つある」
ジョルジュ・フロベールは、いつものように鼻眼鏡をずりあげながら言った。
「一つ、生徒総監と常に連絡を取ること。一つ、神の御心に反するような学問は専攻しないこと、一つ、これらにそぐわない報告がもたらされた場合には即退校させること。いいな？」
「はい」
右腕に包帯を巻いたカミュが、誇らしげに父親を見上げる。彼はとうとう父を説き落とし、スイスのギムナジウムに入学することを認めさせたのだった。怒りに任せて殴った拍子に右腕を怪我させたことが、ジョルジュには負い目になったのだ。
「勿論、アルテンベルク高等学院からならソルボンヌも狙える。私はまだ諦めた訳ではないぞ？　自分が理学に向いていないと解ったら、すぐに転向すればいい」
「解っています、御父さん」

喜びをかみ殺し切れず、うっすらと赤い唇に笑みを浮かべる。あのアスコーナで出会った黄金の髪の少年に、大声で自分の掴んだ勝利を叫んでやりたかった。彼に出会えなければ、今日の自分はなかったのだ。

――ミロ・・・君はどうしてる？――――

自室に戻り就寝支度を整えた後で、降るような星を眺めながら問う。

――君が行かないと言った学校を、私は受けに行く。休みになったら、またあのアスコーナの町まで君に逢いに行ってもいいだろうか？――――

ちくりと痛みが胸を差した。有名な神学者の息子としてでも、突然変異の生きた見本としてでもなく、自分と同じ『仲間』として見てくれた少年。彼もあのままアルテンベルクを受けていてくれたら。気が付けば、そう願っている自分をカミュは知っている。

「来る訳ない・・・か。あんなに独立するのを楽しみにしていたのだから――――」

小さな呟きが、風に乗って流れていく。来る筈がない。そうでなければ、何故あんなにも胸を張っていられるのか。

夜風が湯上がりの火照った頬を撫でていく。満天の星の更に遠くを眺めつつ、カミュは幾度となく深い溜め息をついた。

その日、珍しくクーリオは夜遅くになって帰ってきた。ルキノは怪訝な顔をしたが、試験を翌日に控えたミロにはそれを訝しむ余裕はなかった。さっき仕事場で捻った足が痛む。どうやら明日の朝あたり腫れてきそうな気配だった。

「明日は晴れるってよ。良かったな」

ベッドの上で本を広げているミロに、戸口から声が掛かる。

「ああお帰り。随分遅かったな…この雨の中何してたんだ？」

ミロは顔を上げた。全身ずぶ濡れになったクーリオが、鞄の中身を机の上にぶちまけていた。

「お前・・・！　いくら夏でも風邪ひくぞ？　さっさとシャワー浴びて来いよ！　上着乾かしといてやるから――――」

「触るな！」
パシッと肌を打つ音が部屋に響く。ミロは打たれた左手をかばうのも忘れて、呆然と義兄を見つめた。何だか様子が変だ。いつになく、おどおどしている。
「・・・悪かったよ。気分が悪いんだ」
クーリオはそれだけ言うと階下に下りていった。
彼は恐ろしかったのだ。今日初めて、ピサロの『計画』を聞かされて。
――大丈夫だ・・・すばしこいミロのことだから、あの程度じゃ大した怪我にはならないさ――――
今夜のうちに主幹道路に妨害物を置き、クーリオが先導役になって明日ミロには崖っぷちの道を歩かせる。そこへ、自然落石に見せかけて上から土砂を流すと言うのが、ピサロの『計画』だった。確かにその崖は岩盤が固く、少々怪我をしても命にかかわる程の事故にはなるまいが――――悪戯と言うにはたちが悪過ぎた。
そもそも、こんな『計画』が生まれたのもクーリオが協力すると言ったからなのだ。
――お前がいけないんだ、ミロ。何もかもお前が一番で、比べられる奴のことなんか考えもしないから――――
その傲慢さが、仲間の反感を招くんだ。クーリオは必死で自分を正当化しようとした。シャワーを浴び、二階に上がる。そっと自室の扉を開けると、ミロは仕事に疲れたのか、既に寝入っていた。
黄金の髪が、無造作にシーツの上で波打っている。
クーリオは、吸い寄せられるようにミロの傍らへと寄った。指先に、癖のある髪の一房を搦め捕る。その黄金が赤い血に染まる情景を想起し、彼はぞくりと体を震わせた。
明日。自分達が望んだ通り、ミロはその血にまみれることになる。
「何も知らないで・・・幸せな明日の夢でも見ているがいいさ」
クーリオは自分を勇気づけるようにそう呟くと、自分のベッドに潜り込んで深く頭から布団を被った。心臓の音が、やけに大きく耳をつつく。
柱時計が十二時を告げる。このまま夜が更けて朝になっても、クーリオは眠れそうになかった。

次の朝は、クーリオの言葉どおり久々の天気だった。ミロは鞄の中身をもう一度確かめると、ラジオを交通情報に合わせた。

アナウンスの女性の声がスピーカーから流れて来る。

『・・・なお、昨日までの雨の影響により、アスコーナからロカルノへ抜ける幹線道路が一部不通になっており、交通機関のダイヤが大きく狂っております。道路障害物の撤去が済み次第渋滞解消の見通しで、午前九時迄には平常時に戻る見込みです・・・・・』

ミロはラジオに聞き入ったまま、その場に頬杖をついた。九時まで解消しないのでは、駅までバスを使うと言う訳にもいくまい。試験は十時からなのだ。

「渋滞？　お前そんなにのんびりしてていいのか？」

「良くない。参ったな・・・・」

ミロはスピーカーに見入ったまま、気の抜けた声でクーリオの問いに答えた。勿論ミロは、その渋滞の原因を作ったのがクーリオたちだとは知らない。素直に困った顔をして見せると、鞄の中から地図を引っ張り出し気難しい顔をしたままページを繰り始めた。

「・・・ついてないな、ミロ。」

「全くだ。何だってこんな思いまでして・・・・」

「バスを使わずに、ロカルノまで歩けば間に合うぜ？」

「一般道路をか？」

思わず聞き返して顔を上げる。町から町へと走る一般道路は、迷路のように入り組んでいて迷わず辿り着ける保証など全くないのだ。

「裏道を使うのさ。山沿いを伝っていけば、一時間弱でロカルノに出る」

「裏道・・・？　知らないな」

「何だって？　お前何年ここに住んでるんだ」

クーリオは呆れたようにミロを見た。険しい山道を歩かせるためにいろいろと言い訳を考えたのが、まるでばかばかしく思えて来る。これならよけいな警戒などせずとも、簡単に自分の言うことを聞くだろう。

「学校の裏に細い道があるだろう。あれをずっと東に上って

いくと、ロカルノの真北に出るんだよ」
「そうなのか？　あの道は入ったことがないから・・・・」
「全く・・・・仕方ないな。送ってやるよ」
　ミロはびっくりしたようにクーリオを見た。試験に間に合わなければ、これ幸いと喜んで黙って見ているだけだろうと思ったのだ。
「・・・いいのか？　往復したら二時間近くかかるんだろう？」
「しょうがないだろ！　途中で道に迷われて後で恨まれても困るからな」
ぷいとクーリオがそっぽを向く。ミロはぱたんと地図を閉じた。昨日の態度と言い、どうもクーリオの様子はおかしかった。
――何か企んでるな・・・・――――
とっさにそのことに思い当たり、僅かに瞳を細める。あるいは、ピサロあたりに脅されているか。
――もっとも、奴等が顔を見せることはないか。――――
ミロは何気なくクーリオの様子を探った。身元が割れれば、自分たちの進学に響いてしまう。それらを考え合わせれば、その裏道とやらがロカルノへ通じているのは確かに違いない。
　ミロは、クーリオの申し出を受けることにした。要は、何とかしてロカルノまで辿り着けば良いのだ。
「・・・ありがとう。それじゃ、道案内を頼むことにするよ」
地図をしまいこんで、鞄を肩にかける。
「さっさと飯食って来いよ。二十分後に出かけるぞ」
いつもと同じ少し突き放したような声が、階段を下りるミロの背後から無造作に降ってきた。
「この登り、どこまで続くんだ？」
　ミロは道の向こうを仰ぎ見て、大きな溜め息をついた。雨が降って足場が悪い上に、昨日捻った右足が悲鳴を上げる。ふと道端に乾いた岩場を見つけて、ミロはその上によろめきながら腰掛けた。急に途絶えた足音に、先に進んでいたクーリオが訝しげに振り返る。

「ミロ？　疲れたのか？」
「悪い。包帯が弛んできた」
ミロはズボンの裾を捲り上げると、解けかかった包帯を自分の手に巻き取った。思ったよりも腫れている。ロカルノまでもつかどうか、状況次第によっては怪しいところ、と言った感じだった。
「何だ　お前、足痛めてるのか 」
「ああ。大したことないと思ってたんだが・・・思ったよりも悪かった」
「馬鹿！　そういうことは先に――――――――」
思わず言いかけて、はっと口を噤む。・・・ミロが足を痛めていると知っていたなら、こんな所には連れてこなかっただろうか？
　否。そんなことをすれば、後でピサロたちにひどい目に遭わされることになるのだ。
「・・・あれが峠だよ。そこからは下りになる」
クーリオは、乾いた唇を湿しながら言った。ミロが怪我をしていたのは計算外だった。あの土砂の濁流を、そんな足でよけられるのか。少々は怪我させるつもりだったとは言え、立ちすくまれて頭でも打たれたら死んでしまう。
　急に、心臓が激しく鳴り始める。クーリオは唇を噛み締めた。あの峠の上の岩陰で、ピサロたちが準備を整えて待っているのだ。
「するとやっと半分か。何とかもつかな」
ミロが何も知らぬげに、包帯を巻きながら言う。
「・・・気をつけろよ。足場が悪いから」
気休めにもならない言葉を返し、クーリオは前方を睨んだ。計画では、クーリオが先に進みその直後に土砂を流すことになっていた。他人のことを構っている余裕はない。タイミングが狂えば、自分も一緒に『事故』に巻き込まれることになるのだ。
　クーリオは足場を確かめる振りをしながら先に立って歩き出した。後ろから、ミロが汗を拭いつつついて来る。何度も崖の上を確かめつつ、一歩一歩追い立てられるようにして峠に近付き――やっとの思いで、彼はその頂上を越えた。思わず後ろを振り返り、崖の上を見上げる。
　その時、彼は見たのだ。土砂に混じって、人頭大の石が崖っぷちをせり出して来るのを。

――ピサロ？　約束が違う！――――

次の瞬間、自分が何をしたのか、クーリオには分からなかった。丁度峠にさしかかったミロに飛びかかり、岩陰に引きずり倒したところまでは覚えている。自分より少し小さいミロの身体を身体の下に押し込み、頭を両腕で抱え込んで――――その直後に、道を埋めつくす程の土石流がなだれを打って襲いかかってきた。

何を叫んだのかまでは覚えていない。悲鳴も何も、すさまじい轟音にかき消されてしまった。

「クーリオ！　クーリオ！　大丈夫か」

ミロの叫びが段々大きくなって、耳に突き刺さる。気が付くと、視界は赤く染まっていた。かつて望んだように、青ざめた頬を伝う血が細く糸を引いて、ミロの黄金の髪を濡らしていた。だがそれはミロ自身の血ではない。クーリオは額を流れる血を拭いもせず、悄然としたまま自分の下で叫ぶミロを見つめた。

「・・・こんなの不自然だ！　いくら雨の後だからって、こんなすさまじい土石流が起こるわけな――――――」

「黙れよ！」

肩に回された手首を掴み、地面に押えつける。鬱積した衝動が、一気にミロに向けて吹き出す。殺気立ったクーリオの様子に、ミロは一体何が仕組まれていたのかを悟った。彼らは、是が非でもミロの受験を妨害するつもりだったのだ。

「・・・お前がいけないんだ・・・！　何でもお前が一番で・・・・俺たちがどう足掻いても手に入れられないものを持ってるくせに、何でもない事のようにそいつを捨ててしまう！」

「な・・・・」

「憎たらしくて当然だろう！　あんなに出来るくせに、働く、働くって・・その上アルテンベルクを受けに入って入学しないだって？　ふざけるな！」

ミロはごくりと唾をのみ込んだ。言いたいことは山のようにあった。だが彼らの反発の、原因の一部は自分の態度にあったことを知らされて愕然としたのだ。

『あなたの望みがかなうように・・・・・』

カミュの言葉が耳に蘇る。

『人は時折、自分だけに与えられた宝物にも気付かない――――』

――それが、罪だった？　自分の本当の望みを殺しても、借

りを返そうとしそのことが――――――
視界が暗くなる。ならば、どうすれば良かったと言うのだろう。
　ミロはやっとのことで口を開いた。血がまた一筋、ミロの頬を伝った。
「・・・そんなに・・・・殺したい程憎かったのか・・・？」
「ちょっと痛めつけてやろうと思っただけだ。今のはピサロのやり過ぎさ。・・足を痛めているんでなければ誰が庇ってなんかやるもんか！」
目に入りそうになる血を払い落としながら、クーリオが吐き捨てる。本心かどうかは、彼自身にも解らなかった。あの時、なだれ落ちる岩を見て何を思ったのか。あの状況では、ひょっとしたらミロの代わりに自分が死んでいたかも知れないのだ。
――――考えるな。何も考えるな――――――
　クーリオは、ミロを押えつける腕に力を込めた。そうだ。せめて、最初の目的だけは果たしてやる。
　クーリオはもう一度ミロの顔を見つめ直すと、今度は追いつめられた獲物のように笑った。
「・・・そうだよな。お前を痛めつける筈だったのに、俺だけが怪我するなんて不公平だよな・・・・」
手首を強くねじり上げたまま、血の気を失った唇を近づける。
「クーリオ・・・・・！」
　ミロは動けなかった。噛み付くような接吻が、未だ整い切らぬ呼吸を止め、抗いを封じた。息苦しさに喘せつつ、固く目を閉じる。唇に刺すような痛みが走り、やがて血の味が口の中に広がっても、ミロにはのしかかる身体をはね除けることが出来なかった。クーリオがどんな目で自分を見つめていたのか。今になって、やっと気付いたのだ。
　激しい憎しみと、憧憬。
「止めろ！　・・早く止血を・・・・・！」
やっと解放された唇で、そう叫ぶ。逃げるための方便ではない。実際に、クーリオの出血は無視出来ない域に達していたのだ。
「うるさい！　俺のことなんか構うなよ！」
鋭い拒絶が帰って来る。クーリオは思いきりミロを睨みつけた。今は、一刻も早くミロの顔を見ずに済む所へ行ってしまいたかった。これ以上ミロのそばにいたら何をするか分から

ない。憎しみと、それと同じ位大きくなりつつある征服欲とが殺意に変わらないうちに、別れてしまいたかったのだ。
「馬鹿！　死ぬぞ！」
「その方がましさ。お前なんぞに介抱されるぐらいならな！」
「そんなこと言ったって・・・・その傷でどうする！」
体を起こし、頭の傷にハンカチを当てる。少しずつではあるが、血は止まりつつあるらしい。もともと、頭の傷は出血がひどいから、見た目程には傷は深くなかった。
「・・・さっさと行けよ。」
急に落ち着いた声で、クーリオが言った。
「え・・・・？」
「これぐらいの山は越えられるだろ。ピサロたちはもう逃げてる筈だ。もう何の危険もない」
ハンカチで押さえた腕の下から、ミロを見上げる。
「・・・何言ってるんだ！　怪我人放って行ける訳ないだろう！」
「俺が行けって言ったら行くんだよ！　殺されたいのか！」
クーリオは怒鳴った。この期に及んで憐れみなどかけて欲しくなかった。
「行っちまえ！　それで二度と戻って来るな！」
「・・・クーリオ・・・・」
「呼ぶな！」
そうか。ミロはクーリオの拒絶の理由を悟って、血のにじむ唇をぎゅっと引き結んだ。これ以上ここにいてはいけないのだ。彼らの目の届くところに。
思えば、十年間もミロはあの家の異分子だった。身に覚えのない罪で蔑まれ続けたことを忘れるつもりはない。だが彼らにとっても異分子の存在は厄介であったに違いなく、その面倒を我慢しなければならない義理などどこにもなかったのだ。
「――――分かったよ、クーリオ」
静かな声で、ミロは呟いた。鳥の鳴き声が、遠く山々に木霊している。
「何とか給費奨学を取れるように頑張ってみるよ。それであの学校に行く。大学を出るまで、二度とここには戻らない。約束する」
クーリオはそっぽを向いたまま黙りこくっている。ミロはポケットから新しいハンカチを取り出した。抗うクーリオの頭

に巻き、きつく縛る。それから泥にまみれた鞄を拾い上げ、右足を庇いつつゆっくりと肩に担いだ。
「それじゃ、行くよ。気をつけて帰ってくれ。――――さっきは、助けてくれてありがとう」
クーリオは、ミロの方を見なかった。ミロは一度だけ振り返ると、後は逃げ去るようにして急な坂を駆け降りた。腫れた足がずきずきと痛む。だが、ミロは速度を緩めようとはしなかった。
――俺には・・・帰る場所なんてどこにもない！――――
涙が、堰を切ったように溢れ出す。
これから行くベルンがその『帰る場所』になり得るのか。そこに行けば、自分を暖かく迎えてくれる人がいるのか。
遠く視線の先にロカルノの町が見えてくる。ミロはやっと足首の限界に気付いて、うずくまるようにその場に座り込んだ。

試験が始まった。前日のうちにベルンへ着いていたカミュは、奨学生選抜のクラスにミロという名前を見て愕然としたのだった。ミロ・セガンティーニ。残念だが、姓が違う。
――彼は、サヴォナローラと言ったっけ――――
何度も記憶を確かめつつ、普通選抜のクラスに入る。カミュの席は窓際の一番前だった。明るい日差しの差し込む窓を通して、美しく飾られた庭園と校門まで続くプラタナスの並木道が見える。美しい学校だと、カミュは思った。
「ミロ・セガンティーニ君！　ミロは来ていないかね？」
突然、入口の方から呼ばわる声が聞こえた。カミュはびくっとして、入口の方に顔をねじ向けた。
「どうなさいましたか、先生」
「いや、奨学生選抜のクラスの子なんだが、まだ来てないんで

すよ。もしかしたら教室を間違っているんじゃないかと思ってね・・・」
「奨学希望の子が？　珍しいですね。うちのクラスには来ていないようですが・・・・」
試験管が小声で交わす会話が聞こえて来る。カミュは何となくその二人から視線を離せず、聞き取りにくい会話に耳を傾けていた。ミロというたったそれだけの名前が、こんなにも自分の注意を引きつける。ふと可笑しくなって、カミュは笑いをかみ殺した。
もしミロ・セガンティーニがやって来たら、一目見てやろう。もしかしたら、良い友達になれるかも知れない。
チャイムが鳴った。試験管が初めの合図をする。カミュは問題用紙を開き、すぐに問題に没頭していった。

「やばい！　始まっちまった！」
駅の改札を走り抜けながら、ミロは腕時計に目を走らせた。試験は十時からだ。二十分以上遅れると、入場出来なくなる。
「参ったな・・・何だってこんな時に足を――――」
電車の中で洗った髪が、きらきらと水滴を弾く。血と泥にまみれたシャツも今は一応白さを取り戻していた。車内の洗面所で洗ってしまったのだ。
――クーリオは無事に家に帰っただろうか？――――
ふと、ミロの胸を不安がつつく。
今朝の事件は、それなりにミロに衝撃を与えた。だが幸か不幸か、いつまでもそのことで悩む時間はミロにはなかった。今は何とかして好成績を納めて給費奨学生になるしかない。今朝の記憶と共にこびりついた血の跡を洗い流しつつ、こんなことならもっと真剣に準備するんだったとミロは思った。
痛む右足をかばいながら、それでも小走りに走り続ける。比較的怪我慣れしていたので、こういう時のミロの対処は至って乱雑だった。
「すみません！　アルテンベルク高等学院ってどっちの方ですか　」
「ああ、その時計塔のある角を左折して橋を渡ればすぐだよ」
「有り難うございます！」
「転ぶんじゃないよ！」

答を聞くないなや、鞄を抱え直して駆け出す。くすくすと笑う老婦人の声が、背後から聞こえてきた。全く、折角有名なベルン旧市街に来たと言うのにゆっくりと町を眺めるゆとりもない。

――あと五分！――――

格式のある学院の正門が見えて来る。ミロは足を速めた。もう少し・・・目的地まで、あと数十メートルだ。

――・・・ミロ ――――

驚きに、胸が痛い程に高鳴る。見間違えよう筈もない。あれは、あのアスコーナの町で出会った少年、ミロ・サヴォナローラだ。

――ミロ・・・？　本当に受けに来た？　このアルテンベルクを――――

「・・・どうかしましたか？」

隣を通りかかった試験官が、訝しげに小声で訪ねる。

「・・・い、いえ、何でもありません」

カミュは上の空のままで答えると、もう一度並木道の方を見つめた。すでに、少年の姿はない。

震える手にペンを握り、問題用紙の頁をめくる。試験に集中しようと試みても、あのまっすぐな微笑みが目の前でちらついた。

――本当に君に逢える・・・？　このアルテンベルクで・・・？

――――

左手をそっと胸にやる。半分はもう書けているとは言え、当分カミュは試験に集中出来そうになかった。

ふと、カミュは顔を上げた。瑠璃色をした美しい鳥が窓のすぐ外の梢で歌っている。少しペンを走らせる手を休めて、カミュはその鳥の姿に見入った。何と言う名なのだろう。こんな鳥を見るのは、初めてだった。

不意に、鳥が梢を飛び立った。正門へと続くプラタナスの並木道の方へ羽ばたいて行く。カミュはその姿を追って並木道の方へと視線をずらし――――そこに予想だにしなかったものを見て目を見開いた。

並木道の間を必死で駆けて来る、黄金の髪の少年。

試験の終わりを告げるチャイムが鳴った。少年達が口々に今日の成果を語り合い、正門の方へと帰っていく。その人波に沿って歩いていたカミュは、正門から五十メートル程離れた地点でふと立ち止まった。

ミロは、きっと帰り道にここを通る筈だ。この並木道を。

それは、祈りにも似た確信だった。この木は針槐ではない。それでも、カミュはミロがここを通ることを信じた。あの日、アスコーナの町でミロに出会ってから。並木道を見る度に、カミュはミロのことを思わずにはいられなかったのだ。

人波を邪魔しないよう、道端によって太い木の幹に寄りかかる。青々と茂るプラタナスの葉が、カミュの頭上でゆったりと揺れている。

出会えるまでは、たとえ夜の帳が下りてもここを動くまい。人波を眺めつつ、カミュはそう固く決心した。

「――懐かしい・・・って言うんだろうな・・・」

それは、ミロが昔見た風景にとても良く似ていた。少しくすんだ空の色、深く濃い影をはく校舎、長い年月を生きてきた大木。それが彼の生まれたウィーンを思い起こさせるのだと気付いて、ミロは独り苦笑した。もう、とうに忘れたと思っていたウィーンでの日々。こんな感覚の奥深くに、まだ息づいていたのだ。

試験の終わった学院には、既に人影はなかった。ミロは遅刻の理由申請のため、最後まで残ってしまったのだった。

やるだけはやった。悔いはない。

自然と、足がプラタナスの並木道へと向かう。入る時は正門から来たのだから、帰りは別の門を通っても良かった。だが、ミロはまっすぐに正門を目指した。並木道に、心惹かれる思い出があるからだ。

プラタナスの大樹が見えて来る。もう一度――いや、これから毎日ここを通れるかどうかは、今日の試験の出来次第にかかっている。ミロはくすりと笑った。いいや。駄目なら駄

目で、せめてこの美しい風景を楽しんで帰ろう。
風が、爽やかな夕べの香りを乗せて吹き渡った。大きな木々の葉が、一斉に揺れてざわざわと音を立てる。ミロはその道の向こうを眺めようとして、はたとその場に立ち止まった。
道の真中で、塑像のように佇む一人の人。
赤い黄昏の光の中で、その艶やかな髪を辺りの大気に溶け込ませて、風に吹かれるままに立ちつくしている一人の少年。
選ばれた者にしか纏うことの許されない、深紅の髪、深紅の瞳――――
手にした書類が両腕を零れ落ちたのに、ミロは気付かなかった。挿み込んであった一枚が、風に吹かれて地面を転がっていく。
塑像のような少年が、僅かに身じろぎした。そして足下まで転がってきた紙切れを拾い上げると、ゆっくりと歩き始めた。
ミロの方に向かって。
「・・・これは、あなたのですね？」
少年の赤い唇が、澄んだクール・ヴォイスを紡ぎ出す。
「君は――――――――」
「始めまして、ミロ・セガンティーニ。ミロ・サヴォナローラのことについて、聞かせてもらえませんか？」
木々のざわめきが、少年の言葉をかき消して一層大きくなる。かつて出会った時よりも少しだけ伸びた髪が、雪のような肌にいくつもの影を描き出す。
ふと、噎せる程の甘い香りを嗅いだように感じた。ミロは胸の高鳴りを聞きながら、喉に深く息を吸い込んだ。これは夢なのか？　現実なのか？　どこまでが現実で、どこからが幻想なのか？
震える唇がおずおずと開かれる。ただひとつ、たった一言の言葉を紡ぐために。
「カミュ！」
無我夢中で、少年の身体を抱き締める。
夕日色の少年が、雪解けを迎えた春の精のように笑った――――――。

宿命の夢――と呼ぼう、多くの障害が
　君の運命と僕のそれとを隔てるから。
だがそれでも僕の思いは燃え争うが
　君の思いには安らぎあらんことを。

to ――――
George G. Byron

ただ一度だけ思いきって眼を上げて――――
　眼を上げて君を見た。
その日以来、空のもとに、
　ほかのものは眼に見えない。

夜、眠りが僕の瞳を閉じても無駄で――――
　僕には夜が昼になる。
僕の目に空しく映ずる姿は
　夢に違いはないのだけれど。

わがこころ　もはや落ちいず
くる日ごと　きみのすがたを
わがあこがれのうちにになう。
まこと　わがこころはきみにとらわる。

きみがまなざしは　わがこころに
予感に充てる火をともしたれば
その炎　絶え間なくわれに告ぐ、
われ、きみのものなるを。

されど浄らかなるきみは
わがこころの情熱に気づかず
われをおきて　悦びの中に花咲き
高々と、星のごとくにさまよう。

Elisabeth
Hermann Hesse